Y03b 東京国際科学フェスティバル3年間の事績とネットワークへの展望

縣秀彦, ○内藤誠一郎, 三上真世，並河正人，林満，平井明，立石直子ほか（国立天文台天文情報センター科学文化形成ユニット一同）, 永井智哉（筑波大学）

関連発表で報告されている通り、国立天文台「科学文化形成ユニット」では、人材養成と東京国際科学フェスティバルの活動等を通して、天文学をはじめとする科学文化の形成が市民生活の質の向上に貢献することをめざしている。

平成21年度より採択された科学技術振興機構科学コミュニケーション連携推進事業 (旧地域の科学舎推進事業)「地域ネットワーク支援」を受けて実施してきた「東京サイエンスネットワーク」構築の事業について、3年間の事績と今後の展開について報告する。

「東京国際科学フェスティバル」は2009年から3回の開催を経て、研究教育機関・生涯学習施設・企業・NPO等団体から市民個人まで、幅広い立場から毎年100を超える団体が実行委員会に参加、様々なコンテンツが集まっており、科学文化によるコミュニティ形成の起爆剤かつ接点の形成を目指してきた。特に、実行委員会会員の4割程度を占める市民が、科学コミュニケーションに主体的な立場で参加すること、地元商工会も交えて市内全域での地域科学イベントを育みつつある三鷹市の事例等、地域の市民活動に根差した科学祭の可能性を探っている。

地域内での科学文化拠点を育てるソーシャル・カルティベーションの取り組みでは、福祉支援NPO法人と協力して開催するサイエンス・カフェ「星と風のサロン」を毎週定常的に続けている。企画・コーディネートにも市民参加を迎え、小規模ながらも100回を超える実績を重ねて、地域市民の科学コミュニケーション拠点として定着の努力を続けている。